

2025 年 3 月 1 日開催
外部評価委員会

2024（令和 6）年度
外部評価委員会 報告書

仙台白百合女子大学

2024 年度仙台白百合女子大学 外部評価委員会報告書

■外部評価委員会について

本学では「自己点検・評価委員会規程」に基づき、自己点検・評価活動の客観性・公平性を担保し、教育研究水準の更なる向上を図るため、外部有識者による評価を行う外部評価委員会を設置している。

また、教育・研究の質を担保するために、自らに対して以下の評価活動を行っている。

- ① 年度毎の学内各部署による自己点検評価（内部評価）
- ② 年度毎の(学内)内部質保証システムによる大学全体の運営に関する内部評価
- ③ 大学基準協会による7年毎の認証評価を通しての外部評価
- ④ 年度毎の外部評価委員会による外部評価

外部評価委員会は④に該当し、大学が外部有識者から評価を受けて現状を正しく認識し、より多様で客観的な意見を大学運営に反映させられるようになることを意図して定期的の実施している。

■2024 年度 外部評価委員会 開催概要

開催日時	2025 年 3 月 1 日（土）14：00～16：00	
場所	本学 会議室 1	
外部評価委員	澤村 満称子 氏	防衛省自衛隊宮城地方協力本部長 一等陸佐
	久保田 賢二 氏	センコン物流株式会社 代表取締役社長
	高橋 正人 氏	郡山ザベリオ学園小学校・中学校校長
	植竹 由美子 氏	本学元教授
本学出席者	加藤 美紀	学長
	白川 充	学部長
	呂 光暁	子ども教育学科准教授 教育課程と学修成果担当
	結城 裕也	心理福祉学科准教授 入学者選抜方法の妥当性の検証担当
	志田 昌幸	事務局長
	中嶋 みどり	心理福祉学科准教授 自己点検・評価委員会副委員長
	八木 孝憲	子ども教育学科准教授 自己点検・評価委員
	鈴木 寿則	健康栄養学科教授 司会 自己点検・評価委員
	高橋 早苗	グローバル・スタディーズ学科教授 自己点検・評価委員
	堀籠 未来	事務局次長 庶務課長
	佐藤 一樹	庶務課員

■当日次第

1. 本学学長挨拶
2. 出席者紹介
3. 委員会の目的・議事進行についての説明

4. 「教育課程と学修成果」
5. 「入学者選抜方法の妥当性の検証」
6. 閉会挨拶

1. 本学学長挨拶

加藤学長より、本学の設立母体シャルトル聖パウロ修道女会と大学の沿革についての説明を行った。その後、本学が提供する今後の教育活動について、豊かな社会的見識を備えた外部評価委員から忌憚のない意見をいただきたいという旨の説明があった。

2. 出席者紹介

名簿に基づき、外部評価委員および本学出席者の紹介を行った。

3. 委員会の目的・議事進行についての説明

本委員会の目的および議事進行について、自己点検・評価委員会副委員長の中嶋より、以下の説明を行った。

外部評価委員会は委員会規程第 10 条に則り、本学の教育や研究の取り組みの現状とそれに対する自己点検、評価の客観性と構成性の担保を目的としている。外部有識者からの改善や改革に資する評価や意見を頂戴し、いただいた意見を改善や向上に向けた施策に活用するところに本委員会の意義がある。

昨今の高等教育において教育の質の向上が強調されているため、「教育課程と学修成果」と「入学者選抜方法の妥当性の検証」が重要なテーマであると言える。今回の委員会ではこの 2 点に絞り、本学より現状報告をしたのち、外部評価委員より意見をいただきたい。

4. 「教育課程と学修成果」報告<IR 推進委員会副委員長 呂>

現状報告

2024 年 3 月に卒業した 4 年生 184 名を対象に、卒業時に大学総合満足度に関する調査と在学 4 年間の GPA の関連を検討した。なお、卒業時アンケート調査では、大学 4 年間で身に付いた力の自己評価（9 項目）、大学生生活満足度に着目した。

主な結果として、①身に付いた力としては、「論理的思考力」「文章力」「表現力」「幅広い視野」など就きたい職業につながる知識や技術に関する回答が高い一方、「外国語能力」「コンピュータ知識・技能」など、IT スキルや外国語の理解力・会話力について低く、課題があると評価していた、②GPA と大学生生活満足度と、明確な関連がみられないという結果であった。③「総合満足度」と比較的関連が強い項目として、「幅広い知識」「論理的思考力」「仕事に直接関係する知識・技術」「幅広い視野」「表現力」「常識・マナー」であった。

また、2024 年度前期までの授業評価アンケートデータを用いた分析について報告された。学生の自己評価による達成度の推移については、達成度「8」以上（高評価）と回答した学生の割合は、直近 3 学期（2023 年度前期・後期、2024 年度前期）で増加傾向にあり、達成度「5～7」（中評価）および「4 以下」（低評価）の学生の割合は、概ね横ばいであった。科目ごとの達成状況については、回答した学生全員が達成度「5」以上と評価した科目の割合は、3 学期を通じて増加しているが、回答した学生全員が達成度「9」または「10」（極めて高い達成度）と評価した「極めて優れ

た授業」と見なせる科目の割合は、逆に減少傾向にあるという結果であった。

報告者より、以上をふまえ、本調査結果と考察全般の妥当性だけでなく、学外有識者からみた学生の自己評価の妥当性、社会人基礎力の定着度に対する印象、在学中にできそうな指導や取り組みについての助言や意見を求めた。

質疑および意見

【澤村委員】高い達成度の詳細や極めて優れた授業の評価について質問があった。

【久保田委員】学生の自己評価アンケートの結果について、学習成果を正確に測るためには学生目線の自己評価のみでなく、教員目線での評価や定量評価などを取り入れ、より多面的な視点が必要ではないだろうかという提言があった。

【高橋（正）委員】今後、生成 AI スキルを持つこと、さらに、常識やマナーの知識、実践力だけでなく、ことばに関する不易のものに関して伸ばすことは大切で、コミュニケーションを伸ばし、人間として本質的な力を伸ばせるかが重要であるという意見があった。単なる翻訳で意味が分かればいいという表層的な理解ではなく、思考、思想、人間性を理解する中で、深い理解へと入っていく古義の部分を加えた教育が大切であるという具体的な説明もあった。

【植竹委員】「卒業生アンケートで約 8 割が大学生活に満足していると回答した点は高く評価すべきだと思う」というコメントがあった。その背景には、多様な学習・経験の機会を通じて、日々、学生の「社会人基礎力」が鍛えられたのではないかと、それがアンケート結果にもつながったと推察できるのではないかと意見もいただいた。

高橋（早）委員より、コミュニケーション能力の重要性をふまえた上で、社会（企業や組織）が新社会人となる若者に対して、具体的にどのような力（スキルや資質）を特に求めているのか、改めて各外部評価委員から教えていただきたいという依頼があった。

【澤村委員】コロナ禍以降、特に複数の人の中で自己表現に抵抗がある人が多いイメージがあるという見解があった。社会の中で養われるべきだと思うが、大学で少し慣れてくると、社会に出て驚かないのではないかと示唆をいただいた。

【久保田委員】学生はインプットに慣れているので、大学 4 年間で理系的思考力の向上が自身のアウトプット能力を上げるため重要ではないかと考えるという主旨の助言があった。

【植竹委員】あるアンケートによると、企業側は、学生に不足していると評価するが、学生

は足りていると感じている一部の能力があり、逆に学生自身は不足していると感じるが、企業側は基本を身に付けていればあとは社会人経験で定着すればよいと、評価する能力があり、その認識のギャップが共有された。

5. 「入学者選抜方法の妥当性の検証」報告<入試広報委員会副委員長 結城>

現状報告

入学者選抜試験の妥当性を検証するため、本学の入学者選抜方法が、入学後の学修成果とどの程度関連しているかを検討した。具体的には、2020 年度から 2023 年度入学生 781 名を対象に、①入学前の成績（高校評定値）、②入学者選抜試験成績（入試成績）、③入学後の学修成果（GPA）との関連を、全体・全学年、学年ごと、学科ごと、入学者選抜形態ごとに相関分析から検討した。さらに、入学者選抜形態（総合型・推薦型、大学共通テスト、一般選抜）の違いで、GPA の高さに統計的に有意な差がみられるかを分析した。

<入試成績と入学後学修成果の関係性>

入試成績が高い学生は、入学後の GPA も高い傾向（正の相関）が見られた。一方、入学前成績と入試成績について、高校の評定平均が高い学生ほど、入試成績が低い傾向（負の相関）が見られた。これは想定外の結果であった。

学年別の傾向について、1 年生時点では、GPA と高校評定平均値・入試成績との間に明確な関連性は見られなかった。2 年生以上になると、高校評定値が高い学生、および入試成績が高い学生は、GPA も高いという正の相関が見られた。

学科別の傾向について、子ども教育学科、心理福祉学科、健康栄養学科では、高校評定平均値と GPA に正の相関が見られた。特に心理福祉学科では、入試成績と GPA にも正の相関が見られた。グローバル・スタディーズ学科では、高校評定・入試成績と GPA の間に明確な関連性は見られなかった。

<入試形態別の傾向>

全ての入試形態において、高校評定平均値または入試成績のいずれかと GPA の間には正の相関が見られた。ただし、推薦型選抜においては、高校評定平均値が高いほど入試成績が低いという負の相関が見られた。大学入学共通テスト利用選抜や一般選抜で入学した学生は、総合型選抜や推薦型選抜で入学した学生に比べて、入学後の GPA が高い傾向が見られたが、これについては、総合型選抜や推薦型選抜のように早い時期に入学が決まった学生は、学習の継続が途絶えてしまうことが原因でないかと考察できる。

分析の考察と今後の課題として、想定外の結果（負の相関）が見られる場合もあったが、概ね入試成績や高校評定平均値が入学後の学習成果と関連していることから、現在の選抜方法には一定の妥当性があると言える。高校評定平均値と入試成績の負の相関については、原因として高校間のレベルの違い（偏差値等）を考慮していないことや疑似相関の可能性があることが挙げられるため、さらなる分析が必要である。

以上を踏まえ、入学者選抜方法の妥当性と本調査結果に基づいた考察全般の妥当性について、

学外有識者から意見を求めた。

質疑および意見

【久保田委員】姉妹校からの進学の仕事と入試形態別の入学者数の割合に関する質問があった。

【高橋（正）委員】入学試験の問題内容について入試形態別の違いについて質問があった。

【久保田委員】入学者の中で自宅通学生と一人暮らしの学生の割合について質問があった。

【高橋（正）委員】入試問題は単に学力を測るだけでなく、出題された問題は、受験生にとって一生にわたって残るものだと思うという指摘があった。大学がどのような学生を求め、どのような教育を目指しているかを示す重要なメッセージ（ブランドイメージ）につながるのではないかという提言があった。

また、DP、AP とあるが、卒業までの成長を意識して、評定値だけで妥当性を検討するのは前提として、入ってきた人をどうするかという視点が重要であるという意見があった。

■報告全体を通じての意見・コメント

【澤村委員】委員会を通じ、「大学は何のために行くのか」「何を学べる場なのか」、大学では、論理的な思考、表現力、視野を持つことの基礎を学べる可能性があると思う。入試を含めて、どのように育てるか、結局どこに目線を置くかで、学生に求めることも変わり、学生が何を学びたいかという点も考慮する必要があると思うが、社会への貢献と両立できる教育が重要ではないかと思うという意見があった。

【植竹委員】仙台白百合女子大学のウェブサイトやキャンパスガイド 2025 で印象に残ったのが学長メッセージであり、そこに、大学の将来に対する明確なビジョンと目標が示されており、他大学にない個性と魅力がよく表れていると感じた。より説得力が増す発信という点で、数値データの活用（例.ST 比（教員一人あたりの学生数）や海外留学研修、国際体験実習の参加率等）を積極的に実施してはどうかという具体的な指摘が主にあった。

【高橋（正）委員】やはり大学の入口である入試において、入試問題自体が大学の教育理念や質を映し出すものであり、白百合のブランドイメージ向上の観点でも品格が伝わるような作問を今後も継続してほしいという意見が挙げられた。また、入試分析のあり方についても、詳細な提言がなされた。

【久保田委員】近年、企業の中には社員が学生時代に借りた奨学金の返済を企業がサポートする制度を持っている会社もあり、今後そのような企業が増えてくるのではないかと感じている。大学側のアピールによっては、経済的理由で私学を断念する

高校生に対して、社会の支援にも触れた様々なアプローチが可能ではないだろうかという提言があった。

6. 閉会挨拶

学部長の白川より外部評価委員に対し、年度末の大変忙しい時期にも関わらず、本日の委員会にて活発な意見交換をしていただいたことに対し、感謝の意が述べられた。本日いただいた貴重な意見は、各主管部署にて報告され、取り組みに反映される。本学は来年創立 60 周年を迎え、様々な取組みに加え、新たに 2 つのセンターを設立予定である。本学は現在改革の真っ只中にあるが、外部評価委員の皆様におかれましては、引き続き本学について忌憚のないご意見をいただければと感じている。

2024 年度外部評価委員会を実施して

中嶋 みどり（自己点検・評価委員会 副委員長）

大学の教育の質を保証するためには、本学構成員が建学の精神に基づく 3 ポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）の方針を鑑み、適切な環境で適切な教育が実施され、成果を可視化し、自己点検・評価を定期的に行う必要がある。そして、外部評価委員会で客観的な意見をうかがうことは、我々が本学の現状を正確かつ客観的に把握できているか、社会からどう見えているかを改めて認識し、以て本学の改善・改革に資する実質的な案を検討する重要な機会である。

2024 年度外部評価委員会では、「教育課程と学修成果」、「入学者選抜方法の妥当性の検証」の 2 点に絞り、産学官連携、社会貢献のあり方、社会人基礎力へのつながり等について 4 名の外部有識者の方々と包括的な質疑討論を行い、今後に向けての改善のための貴重なご意見を多数いただいた。

その中では、「大学は、何のために行くのか」「何をどう育てるか、社会に貢献できるか」という、本質的な問いや本学の存在価値が何かに立ち返ることができた。本学は、建学の精神に基づき、ビジョン 2030 として、「よりよい世界をつくる ～人々と共に、他者のために～」を掲げ、「一人ひとりのいのちが輝くために ～Believe, Hope & Love～」をスクールモットーとしてしているとおり、カトリックの精神に基づく思想、哲学的な視点を学び、豊かな人生につなげていくことに価値がある。この点が他の大学にない個性や魅力であることをご示唆いただき、三世紀以上の歴史をもつシャルトル聖パウロ修道女会の精神に誇りを持ち、教育でもって貢献していく姿勢の大切さを確認できた。

教育課程と学修成果については、「卒業生の 8 割が満足できる・やや満足していること自体を高く評価すべきではないか」と本学に対する肯定的な評価をいただいた。一方で、入学前から卒業までの学生自身の達成度評価に偏った評価だけでなく、教員目線の評価も加えるなど、精度を高める必要性があり、データの蓄積と検討に継続して取り組むことが課題である。

また、コミュニケーション能力に関し、「アフターコロナ以降、コミュニケーション能力の課題を感じる」という現場感覚でのご意見をいただいた。「複数人の中で自分を表現することに対する躊躇・戸惑いが一層強まっている」点について、本学は小さな大学である利点を活かし、学生時代から慣れる機会を持てる可能性をご示唆いただいた。

さらにコミュニケーション能力は、多様な範囲を含んでおり、外国語の翻訳ができれば良いという表層的理解・能力をつけることが重要ではなく、ことばの古義を理解し、その言葉の使い方に関して不易なもの（時代や状況の変化に関係ない本質的な理解）を醸成する必要性をご提案いただいた。さらに、「学校教育はインプットに比重が高いが、理系的思考、論理的思考で、アウトプット表現をする力が重要ではないか」、「大学教育では、ここに付加価値があるのではないか」という主旨のご意見も複数いただいた。

そして、本学が「良い教育を実践しているにもかかわらず、アピール不足である」というご指摘があった。例えば、少人数制教育や海外留学・国際体験について訴求力を高めるべきであること、入試分析についても緻密な検討をすると共に、新奇性や白百合ブランドを公表すること、「伸びて

いく白百合、延ばす方向を持つ白百合」という意識を推進すると良いのではないか」というご意見もいただき、可能なものから施策に活用することが重要だと考えられる。

最後に大学進学を考えようとする人が経済的な事情から進学を諦めないようにするために、奨学金返還を肩代わりする企業があることを、企業と教育機関が連携して周知することによって、進学率を上げ、質の高い教育が受けられるようにし、社会に貢献する可能性についてのご意見をいただいた。

外部評価委員の皆様には、以上の貴重な意見を多数いただいたことに深く感謝申し上げるばかりである。今後も、大学が誠実な自己点検評価を行うと共に、貴重な意見を反映させ、着実に教育の改善、質の向上に努める施策として講じる所存である。